

AR CA DIA

70
SPRING 2017

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]

II
OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館



分はほとんど変わらない。また、両本を通じ左隻左端に、それぞれ描かれた二本の松の彎曲する幹の形態や枝振りなど、両者でかなり似通う。松栄本が新調され、納められた天正九年、元信本がすでに興福寺に在ったことは間違いないから、制作に当っては、元信本から直接的影響があったのでは、と勘ぐりたくなる程だが、もとより断定はできない。

いや、それを云うのなら、父元信が天文十年(一五四)十一月三日、西國の太守大内義隆より「御屏風金三双」と「御扇百本」の注文を受け、次の、

一双分絵 鶴亀松竹鴛鴦鴨小鳥也

一双分絵 月日桐孔雀鳳凰也

一双分絵 松楓柳桜也

おそらくは惣金屏風三双を制作しているから(完成して山口に届けられたのは天文十二年六月^{天文八年及十六年}入明注文要例「至大唐御進物別幅分」)、松栄本は、その折の主要モチーフが一致する「月日桐孔雀鳳凰図」の制作実績を踏まえた、とみる方が自然だろうか。だが、いずれにせよ、父元信からの影響は疑いない。

そうした中、わたしがとりわけ注目したいのは、やはり元信本とのモチーフの一致である。季節の表現としての樹木や草花に共通するものが少なくない。もとより季節を超越した松や、春秋を代表する桜や楓(紅葉)が重なり合うのは当然としても、牡丹に芙蓉、躑躅などが共通するのは見逃すべきではないだろう。いずれも白や紅の花が金地に映える。惣金屏風ならではのモチーフ選択とも言えそうだが、必ずしも理由はそれだけではないだろう。そう思えるのは、牡丹や芙蓉など素地の屏風にも頻出しているからである。さしずめ狩野之信の『花鳥図屏風』(雪山のような明確に冬と断言できるものがないため、表記の名称にした 東京国立博物館蔵 図2)こそが、その代表例であろうか。念のため、ここでも描かれた花鳥の名を列記する。

右隻

孔雀・小禽

松・梅・椿

牡丹・春蘭・蒲公英・葦

左隻

錦鶏鳥・小禽

柳・檜

芙蓉・薔薇・茶・浮薔

見るようにここでも元信本との関係が色濃い。孔雀と錦鶏鳥をはじめ主要モチーフは、ほとんど変わらない。唯一、異なるところと云えば、元信本で右隻右端にあった躑躅が消え、

そこに左隻左端に在った紅椿を移したため、空白となった左隻左端に新たな花を登場させたことであろうか。その花が薔薇であったことは、実に興味深い。

筆者の狩野之信は正信の息子、元信の弟にあたる。近年の研究によって文亀年間(一五〇一〜一五〇三)に生まれ、天文八〜一〇年(一五三九〜一五四二)三九歳で歿したと云う(松木寛「狩野之信の花鳥図屏風―謎の画家狩野之信の実像を解明」『聚美』3号 二〇二三年)。これに従えば之信は、父正信とは年の差が祖父と孫ほどで、兄元信とは父子ほどにも離れた弟と云うことになるのだが、いずれにせよ彼は、松栄と共に元信周辺に在って、元信による狩野派の近世画壇への飛躍を支えた有力絵師とみてよいだろう。

その之信や松栄、そして元信の「四季花鳥図」、そこで取上げられた花と鳥のモチーフが、おおむね一致する。わずか三点の屏風の検証に過ぎないと批判されそうだが、それが狩野派の図様構成の確立期の作であるだけに、むしろそこで取上げたモチーフこそは、その時期の狩野派「花鳥図」の特色と云うか、新しさそのものではなかつただろうか。むろん、それらのモチーフを選んだのは、元信その人であつたに違いない。

重要な点は、その花や鳥たちが、季節の表現としてわたしたちの先祖が見出し、育んできたものと大きくズレていることだ。端的に言えば、「定家詠十二ヶ月花鳥和歌」の詠んだ花や鳥と重なり合うものが全くないのだ。となれば、それらは従来とは全く異なる範疇から選ばれたとみる他あるまい。

忘れてはならないのは、それらの新しいモチーフの採用によつて、わたしたちを取りまく花や鳥がどれほど多彩に、そしてそれを見つめる眼がどれほど豊かになったかである。しかもここで選ばれた花や鳥は、その後も描き継がれていく。その代表が牡丹であろうか。前掲した三屏風でも常に前景で咲き誇っていたはずだ。その牡丹園に迷うのも興だろう。

金屏のかくやくとして牡丹かな

燕村



図1「四季花鳥図屏風」狩野松栄筆 白鶴美術館蔵



図2「花鳥図屏風」狩野之信筆 東京国立博物館蔵

岡崎市美術博物館では、「京都市美術館名品展 京の美人画二〇〇年の系譜」を四月八日(土)から五月二十一日(日)まで開催します。

女性をモチーフとして、美術作品を創り上げることが古くから行われてきました。特に江戸期の浮世絵では美人写しなどと呼ばれ、多くの作品が残されています。京都で美人画が一つのジャンルとして確立したのは明治期中頃以降です。女性の表面的な美しさのみならず、理想の女性の美の描出を目指し、様々な女性の姿が描かれました。本展では、大きく全体を三章に分け、作品を展示します。

まず第一章では「京都の美人画」をご紹介します。長い伝統のなかで独特な文化や風俗が培われた京都では、地域にまつわる文学や芸能、生活を描いた美人画が豊富で、京都の場所柄を色濃く反映して多様に展開していきました。京都らしい風俗や文化の中で描かれた美人画や歴史や故事にまつわる美人画が多く描かれています。この章では京都ならではの美人画の多彩さをお愉しみいただきます。

第二章では、「美人画のさまざま」

を展示します。明治中期頃の一つのジャンルとしてまとまった美人画ですが、当初から描かれる女性たちは多岐にわたっていました。女性の愛おしさやたおやかさが描かれる一方で、日常生活の端々に見る美しさや暮らしの憂さから滲む美をそれぞれ描いた美人画は女性にまつわる美の豊かさを物語ります。また日本画の新しい描き方を模索した国画創作協会が大正七(一九〇八)年に結成され、社会に生きる女性たちの生き方に関わる美が問われるようになったことでもあります。この章ではさまざまな展開をした美人画の変奏をご覧ください。

第三章では「美人画の展開」をご紹介します。一つのジャンルとしてまとまって以降、美人画は時代を反映しながら変遷をたどり、現代まで描き続けられてきました。近代化がめざましく進んだ大正期から昭和初期にかけては、モダンで進歩的な女性の姿が多く描かれ、また当時の機運であった帝国主義を背景にしたアジアへのまなざしに応じるように東洋の諸外国の女性たちも多く

EXHIBITION

描かれました。昭和中期以後は、戦況の悪化とともに働く女性たちの姿が多く描かれ、もう一度国内へと目が向けられていきました。終戦後には美人画というジャンルではあるものの、裸婦や母子像といったテーマで描かれた作品も現れ、新しい美人画への幕開けともなりました。この章では、明治末期から現代にいたるまでの変遷をたどりながら、新しい美人画の流れをご覧ください。

昭和八(一九三三)年十一月に昭和天皇の即位を記念して「大正記念京都美術館」として開館した京都市美術館が当初から収集してきた明治以降の美術の変遷とその特色を反映する京都画壇を中心とした作品のコレクションの充実は他に類を見ないものとなっています。美人画の名品六〇点を通して、多彩な女性の美をぜひご鑑賞ください。



上村松園《春光》昭和戦前期

企画展

京都市美術館名品展

京の美人画100年の系譜

内藤高玲

会期：平成29年4月8日(土)～5月21日(日)

特別企画展

家康の肖像と 東照宮信仰

浦野加穂子

当館の位置する岡崎市は、徳川家康の生誕地です。天文十一年（二五四二）岡崎城に生まれた家康は、慶長八年（一六〇三）征夷大将軍に任ぜられて江戸幕府を開き、元和二年（一六一六）七十五年の生涯を終えた後には、神格化されて「東照大権現」として祀られ、各地に東照宮が建立されました。家康の肖像は数多く残されていますが、これは家康が江戸幕府の創始者であるとともに、没後「東照大権現」として祀られたため、各地の社寺や将軍家、大名家などで崇拜され、祭祀などに用いられたことによります。本展では徳川記念財団の所蔵資料を中心に、各地の東照宮や社に伝わる多様な家康の肖像を一堂にご覧いただきます。

神格化された家康の姿を描いた



東照大権現像 四代木村了琢筆 天海賛 徳川記念財団蔵

EXHIBITION

「東照大権現像」の最初期の作が、四代木村了琢筆、天海賛の「東照大権現像」（徳川記念財団蔵）です。天海は徳川家康の帰依をうけて政治にも参与し、家康の没後、東照大権現の祭祀を主導した天台僧であり、東照宮信仰の普及のため、多くの東照大権現像を描かせ、自ら賛を入れました。東照大権現像の基本図様は、瑞雲が垂れ込め、御簾があがる宮殿内に黒い袍の束帯姿で威儀を正す姿で、天海に重用された木村了琢や神田宗庭ら「深秘の絵師」より制作され、以後その図様は変容しながらも、継承されていきます。徳川記念財団本の背景には、日光東照社の社殿や日光山の伽藍とみられる景観が描かれています。

神格化の初期の段階では、高僧の賛をとまなう通例の供養像形式の像や伝統的な武家束帯像も描かれています。徳川記念財団には、歴代将軍の正式な肖像画を描くための原画（紙形）に当たるとみられる白描画が多数伝来しています。その制作に際しては肖像性が求められることから、同財団の「東照大権現像（白描）」の精悍な顔立ちが、真の面貌を伝える可

能性が高いと考えられます。

「霊夢像」は祖父家康を深く尊崇した三代家光が、夢で見た家康の姿を幕府の御用絵師である狩野探幽らに描かせた姿で、夢の画像に相応しく淡彩でおおらかに描かれています。図様は瑞雲が垂れ込めた宮殿内に坐した家康が袍を着用した姿と平服姿のものがあり、寛永十九年（一六四二）頃の制作を境に、眼を見開いた精悍な表情から、仏を彷彿とさせる眼を細めた静謐な表情に変わっていきます。

家光と家康が、宮殿内で対面し、家光が家康から金扇に載せた鶴を戴く姿が描かれた霊夢像（徳川記念財団蔵）もあります。金扇は家康の馬印、鶴は瑞鳥です。本図とほぼ同じ図様の家光像が日光山輪王寺に伝来しており、家康の権力と権威を継承しようとする家光の意図が窺われます。

多岐にわたる家康の肖像を通して、その実像に迫るとともに、当時の人々の家康に対する尊崇や信仰について紹介し、郷土の英雄、家康に対する理解を深めて頂ければ幸いです。

会期：平成29年6月3日（土）～7月17日（月・祝）

地域史を考える視点①

堀江登志実

学芸員活動で得た三河の地域史を考える視点について今回から紹介してゆこう。

川から地域の歴史をみる「矢作川―川と人の歴史」という展覧会を平成十一年に当館で行った。現在川は生活からかけはなれた存在であるが、近世では物資を運ぶ大動脈であり、川を通じて人と人の交流があったことを伝えるのが企画の意図であった。この構想の背景には当時調査が始まっていた愛知県史調査での体験がある。旧足助町の小出家調査では、足助と西尾の平坂湊との関係、さらには岡崎商人との関係など、注目すべき資料があったが、それらには矢作川が深く関わっていた。西三河の挙母・岡崎・西尾の各城下町は矢作川沿いに位置する。西三河では東西交通の幹線が東海道、南北物流の幹線が矢作川、交差するのが岡崎である。近世岡崎の繁栄は矢作川に依拠しているといっても過言でない。この確信が矢作川の展覧会を導いたのである。

展覧会にはかならず副産物がある。開催中にもたらされるさまざまな情報である。豊田市岩倉町の磯貝

さんからは、矢作川支流巴川の平古廻船問屋の資料を提供いただいた。問屋だった磯貝さんの熱心な話しぶりは今でも脳裡の記憶に鮮明に残っている。河川問屋として山間部の物流を担った自負があったのである。磯貝さんからは荷揚げ場からの輸送に係る馬士たちの存在の重要性を教えられた。

河川による物流という視点は、現在もその重要性の認識に変わりは無い。ただ、奥三河からの中馬による物流に対する認識を高めないとけないと考えている。三河内陸部での移動距離は圧倒的に陸送が長いからである。当時の人々の生活を支える物資がどのような手段で運ばれたか、その検証は楽しみである。



COLUMN & TOPIC

暮らし展《小学生見学騒動記》

伊藤久美子

収蔵品展「暮らしのうつりかき」(会期：二月一日―三月二十六日)も無事に閉会し、展示された道具たちもそれぞれ所定の収蔵場所に戻りました。かつて身近にあった生活道具とは言え、約二か月にわたる晴れ舞台に、道具たちはやはりちょっとお疲れ気味の様子。とくに触ってみようコーナーにあった道具たちは、大きく壊されることはなかったものの、子どもたちに好きになように、はたまた想定外に触られました。実際に触らせるといことは、資料として手入れをし保存していく観点とは正反対、壊れるかもしれないというリスクを抱きながら、毎回ドキドキの試みなのです。でも、触ってもいいの！と子どもたちの弾けるような声と楽しかったという笑顔をもらうと、このコーナー外せなくなってきました。



さて、小学校三年生社会科への学習支援を兼ねたこの展覧会、回を重ねるごとに子どもたちに理解を深めてもらう工夫や見直しをしているのですが、毎回それを軽く飛び越える子どもたちの言動に驚かされています。幾つかご紹介いたします。

手あぶり火鉢の中に手を突っ込む子がいるのは毎度のこと、中に入れている黒い石は何？(豆炭です)、この砂きれいだね(それは灰です)。和式トイレの朝顔形小便器に腰掛ける(昔の洋式トイレではありません)。江戸時代のお雛様をぶっさいくーな顔とバツサリ(当時の美男美女も形無し、夜展示室で泣いていたことでしょう)。一番人気の足踏みミシン、動かすのにムズイ(難しい)を連発(君たちの日本語の方がムズイです)。今回、一番驚かされた質問「炭火エアコンはなかったの？」炭火アイロンがあるから、そう思ったのですね。目からウロコというか、虚をつかれてびっくり、降参です。

次回も、子どもたちに負けないように頑張りたいと思います。

今年度開催の秋葉信仰展に向けて、昨年二月八日、岡崎市の総持院の祭礼の調査に伺った。総持院は臨済宗の寺院で、鎮守神として祀られているのが秋葉三尺坊大権現である。

祭礼は大きく二つに分けられる。一つは午後二時から行われる大般若経の転読である。住職とともに五人の僧が一気呵成に読み上げていく。法要後参列者には札が手渡されるが、細川町や高橋町など市内全域から参拝しており、信仰圏の広がりをうかがい知ると同時に、市内にある他の秋葉大権現を祀る寺社との関わりが疑問に残った。

午後五時からは御嶽教の先達による修法が執り行われた。小炉と呼ばれる祭壇の炉に棒を井桁に組み火が点けられ、その火に向けて九字護身法を行い印が結ばれる。そのたびに火は勢いを変え大きく揺らぎ、さながら火に生命が与えられ、それを飼い慣らしているようであった。小炉の火が鎮まると線香の束に火を移し、火渡りの場まで運んでいく。ただしそのまま火を点けるのではなく、脇に用意された炉に火を移しその火で点火した。二段階の炉を用意することで火を治

め、制御できるようにしているそうである。五mほど燃え上がる火が鎮まると、いよいよ参拝者が火渡りを行う。集まった参拝者は三世代一緒になど代々伝統的に来ている人が目立った。渡る人の願いを尋ねると、一番多かったのは健康で、意外にも防火は次点であった。話を聞いていくと、お札を貰わなかった年に火事に遭った、火の不始末のところたまたま雨が降ったおかげで大事に至らなかったなど、火にまつわる体験が信仰心をより深くする一因となっていた。江戸時代に隆盛した秋葉信仰が現在まで続いている理由の一端をうかがい知ることができたように思う。市内に残る事例はまだ多い。さらなる調査・聞き取りを行い、三河における特質を探ってきたい。



COLUMN & TOPIC

美術館は展示内容だけでなく、建物自体など、あらゆる要素がその魅力となつていきます。これまで訪れた中で最も印象的な美術館の一つ、フランスのルノワール美術館は、作品鑑賞とは違った形でも画家の魅力を感じさせる美術館です。ここはフランス南部のカーニユ・シュル・メールに位置し、印象派を代表する大家ピエール・オーギュスト・ルノワール(一八四一〜一九一九)の自宅だった場所を美術館としています。カーニユは海沿いの温暖な気候の町で、ルノワールはここで晩年を過ごしました。各部屋に作品が展示されていますが、解説パネルは最小限で、家具や画材はいかにも当時のままの様に淡々と置かれています。ともすれば展示としては無愛想ですが、かえってその方が美術館という施設ではなく、「家」の雰囲気を感じさせます。画家が留守にしているところにお邪魔しているような親しみのある気持ちになり、空間そのものが画家の手柄や暮らしぶり、生涯についての想像を膨らませてくれます。

この美術館に訪れたのは数年前ですが、先日その時のことが強く思い

出される展覧会がありました。今年一月まで三菱一号館美術館で開催された「拝啓ルノワール先生 ―梅原龍三郎に息づく師の教え―」です。洋画家梅原龍三郎(一八八八〜一九八六)が、西洋の画家から受けた影響や交流が様々に紹介されました。梅原が憧れてやまなかった画家の一人がルノワールであり、一九〇九年、彼はルノワールを訪ね、まさにあのカーニユの自宅で出会ったそうです。梅原が一体どれだけの昂揚感を持って訪れたのか、あの場所を思い出しながら感慨にふけりました。

作品を見ることに勝る魅力はありませんが、美術館でのこうした体験もまた、大切であると実感しました。



ルノワール美術館の庭

INFORMATION

■平成29年度企画展

京都市美術館名品展 京の美人画100年の系譜

平成29年4月8日(土)～5月21日(日)

■高田啓史氏によるスペシャルギャラリートーク

日時:5月7日(日) 午後2時～

講師:高田啓史氏(小紋屋高田勝主人)・荒川貴夫氏(くすや呉服店店主)

■ギャラリートーク

日時:5月3日(水・祝)・5月5日(金・祝)・5月13日(土)・5月21日(日) 午後2時～

■平成29年度特別企画展

家康の肖像と東照宮信仰

平成29年6月3日(土)～7月17日(月・祝)

■講演会(いずれも午後2時～)

①「家康公を育てた岡崎」

日時:6月3日(土)

講師:徳川恒孝氏(公益財団法人徳川記念財団理事長)

②「描かれた東照大権現像の広がり」

日時:6月11日(日)

講師:浦木賢治氏(埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員)

③「三河の東照宮－瀧山・鳳来山東照宮を中心に－」

日時:6月18日(日)

講師:堀江登志実(当館副館長)

④「歴代将軍の肖像画について」

日時:7月2日(日)

講師:榊原悟(当館館長)

⑤「大樹寺東照大権現坐像をめぐる」

日時:7月8日(土)

講師:塩澤寛樹氏(群馬県立女子大学教授)

■バスツアー「家康ゆかりの三河の東照宮をめぐる」

日時:6月24日(土) 午前9時30分～午後4時30分[雨天決行]

コース:当館出発→瀧山東照宮(滝町)→大平八幡宮(大平町)→鳳来山東照宮(新城市)→当館着

定員:30名(応募多数の場合は抽選)

参加費:無料

■ギャラリートーク

日時:6月17日(土)・7月1日(土) 午後2時～

一年の変化

昨年の四月に美術博物館に来て、あつという間に一年が経とうとしています。当館での仕事については、改善点も多くありますが慣れたところなので、今後一層精進したいと思っています。私生活での変化は、以前よりも行動力がついたのではないかと特に感じています。休日には、各地の美術館やギャラリー、アートフェアなどを訪ねる回数がこの一年を通してぐんと増えました。様々な作品を観ることは、現在の美術の動向を知ることをはじめとして、展示の方法やコンセプトも非常に勉強になります。最近では、少しずつですが作品から情報を読みとる力が上がってきたのではないかと感じています。自分の担当する展覧会にも、学んだことを応用していきたいと考えています。

各地で開催される展覧会を観るなかで興味深いスペースにも出会うのですが、特に興味深いのは、東京・天王洲にある「TERRADA Art Complex」といういくつかのギャラリーが同じフロアに入ったスペースです。建物の外観は大きな倉庫なので、入口は少し分かりにくいのですが、新しい表現の発信地に良い刺激をもらいました。岡崎市美術館博物館でも、この興味深いスペースのように面白い切り口から様々なことを発信していけたらと思います。

(高)

おしゃべり、あれこれ。

身近な創造性

おしゃべりをする、という任を拝した。せっかくなので、おしゃべりについて少しおしゃべりしてみる。

ソシユールは言葉をパロール(言)とラング(言語)に分類した。前者は日常的な話し言葉を指し、後者は語彙や文法からなる○○語の総体を指す。一般にソシユールは後者を研究したといわれるが、会話を軽視したわけではない。会話中の即興的なトーンチが語彙を拡張し、誤用が広まって文法に変更を迫ることもある。要は、秩序と逸脱の往還。

こうしたことを思うとき、セルトーを思い出す。規範や規則に対して、生活する人々が工夫を凝らして「なんとかする技術」にセルトーは注目する。近道をみつづけること、料理のレシピをちよつと変えてみることに、替え歌をすること、おしゃべりをするに、すなわち *arts de faire* (なす／つくる技)。創造は日常と遠くない。

ところで、実のところ、わたしは書いている。このことについても書こうと思ったが、もう余白がない。おしゃべりと違って、紙面には選ばれた言葉しか残らないのだ。読者には想像だけが許される。しかし、「美しき誤解」といったのはだれだったか、読むこともまた創造に開かれていく。そして、見ることも同様である。

(石)

編集後記 | いよいよ平成29年度の展覧会がスタートしました。勤務最終年となる副館長の堀江の連載も今号からスタートです。どんな内容になるか編集も聞かされておりません。次号以降も楽しみにお待ちください。(湯谷)

表紙図版:丹羽阿樹子《遠矢》昭和10(1935)年 京都市美術館蔵



開館時間 午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第70号 2017年4月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA